

9年ぶりのジョージア

菅野峰明

シカゴからアトランタへ向かう飛行機の中から眼下に広がるアパラチアの丘陵地帯を眺めていた。機内放送が「到着地アトランタの気温は100度(約39℃)…」といったとたん、機内はざわついた。100度と聞いて、私も冷房のきいた機内にいながら暑さを感じたような気がした。昔の5年間のアメリカ滞在によって華氏100度がどのくらいの温度になるかを体が覚えていて、アメリカ人の乗客と同じように反応していた。アメリカ南部の夏の気温が華氏90度(32℃)になるのは珍しくないが、華氏100度になるのは珍しい。すでに日本を出発する前からアメリカ南東部は熱波に襲われているということを知っていた。しかし、これほどの暑さとは思ってもしなかった。1986年の夏のことである。

1972年から5年間大学院時代を過ごしたジョージア大学で再び学ぶ機会に恵まれ、9年ぶりにジョージア州アセンズを訪れようとしていた。1972年にはカンザス大学で仲間と一緒に英語の講習を受けた後、そこから一人でバスを乗り継いでアセンズへ着いた。今回は、出発日の都合で成田からシカゴ経由でアトランタへ行き、そこからまた小さな飛行機でアセンズに行くことになっていたが、すでに日本航空が成田ーアトランタ間(シアトル経由)の定期便を週2便運行しており、日本とアメリカ南部の間は近くなっていた。成田ーアトランタ線の運行開始は日本企業の南東部への進出を反映しているといわれている。1970年代後半から日本企業が南東部に進出するようになり、1987年には進出企業数が350社を超えるようになった。南東部の航空網の一つの大きな中心がアトランタであるので、成田ーアトランタ路線の意義も理解できよう。

1970年代前半には、アメリカ南部のことを書いた本はごく僅かしかなく、南部の人種差別を強調した本に影響されて、南部は日本人にとって暮しにくい土地というイメージが強かった。私が初めて南部に足を踏み入れたときにも、人種差別に対する不安感で一杯であった。それが、この15年ほどの間に南部は急速な経済発展をし、サンベルトとして注目されるようになった。日本の企業は、南東部の州政府の積極的な誘致

策、豊富で比較的安価な労働力、労働者の勤勉さ、労働組合への加入を義務づけない法律の存在などを利用して、南東部諸州へ進出した。合衆国に進出している日本の企業数が最も多いのはカリフォルニア州であるが、同州に次ぐのが南東部のジョージア州である。ジョージア州には1970年代前半にYKK(吉田工業)が進出し、1986年秋に完成したカーター大統領記念図書館に日本庭園を寄贈して、ジョージア州の代表的な日本企業となっている。

アトランタからアセンズまでの30分たらずの飛行中に見たビードモントは熱波と干ばつのせいか、赤土が目だった。もちろん、ビードモントの綿花が衰退するにつれて、綿花畑は牧草地、大豆畑、林に変わってしまっていて、表土の見える部分は少ないが、その少ない島状の所に懐かしい赤土が見えた。ジョージア大学院に留学中、南部の農業に詳しいプランティ教授の巡検でビードモントを歩き回って、日本にはないような赤土を見て驚いたことを思い出す。

ダウンタウンのホテルに荷物を置いてすぐに大学の地理学教室に挨拶に出かけた。地理学教室の前の廊下で教室主任のフィッシャー教授にバッタリと会い、「ハーイ、ミネアキ」と言われると、一瞬、敬語をつけるべきかどうか迷った。ここの大学院を修了してPh.D.を得たときに、回りの先生からこれからファースト・ネームで呼んでいいといわれていたが、「ハロー、ドクター・フィッシャー」という日本的な返答しかできなかった。かなり身につけたと思っていたはずのアメリカの習慣が9年の間に次第に失われ、日本的な習慣に戻ってしまっていた。事務室で客員研究員としての手続きをしていると、私を知っている回りの秘書達が「あれから9年、早いね。」と言っていた。

時差ボケだからホテルで休むといって、地理学教室の建物を出ると、外は頭が痛くなるほどの暑さだった。いつも青々としていたキャンパスの芝生は枯れて黄色の部分が多くなり、樹木の葉は根から遠いところほど黄色に変わり、水不足が一目瞭然であった。

(埼玉大学)